

長明・兼好の無常観, 人生観比較考察

—「方丈記」「徒然草」を中心に—

張 晋 洙*

〈目 次〉

I. 序 論	1) 鴨長明の人生観
II. 本 論	2) 吉田兼好の人生観
1. 無常観	3) 長明・兼好の人生観
1) 鴨長明の無常観	比較考察
2) 吉田兼好の無常観	III. 結 論
3) 長明・兼好の無常観	参考文献
比較考察	英文抄録
2. 人生観	

I. 序 論

日本中世の隨筆文学の名作品である鴨長明の「方丈記」と吉田兼好の「徒然草」では日本古典文学の中でももっとも思想性が豊かなすぐれた作品であり、中世の隨筆文学を代表している作品である。確固たる思想と流麗な筆致によって感銘をあたえた「方丈記」は13世紀日本の時代相を覚醒させ、その当時多くの人たちの心の中に抱いていた現世の無常を描写している。また人間ひとりひとりの環境と身分による榮枯盛衰の苦惱を予示している。

特に長明が提示した乱世の求道精神はその当時のもっとも適した精神であるし、「方丈記」に現われた仏教思想を背景した限り維摩教¹⁾の淨土思想は作品の中に主要思想として現われている。

しかし「方丈記」が発表されてから約100年後に兼好が書いた中世の隨筆文学で有名

* 한국해양대학(일문학전공)

1) 維摩教というのは維摩結所説教の略語で維摩居士の盤若皆空の思想を論じたので不可思議な解説教という。

な『徒然草』には全篇を通じて作者の無常観と人生観から始まった自然観及び仏教だけでなく有職故實²⁾等にいたるまで兼好の思想を探究して見ようとする。

鎌倉時代の末期に兼好によって書かれた『徒然草』は王朝時代の貴族的な考えを調べて知ることができるが、このような時代的な思想を正確に知るためにはまずその思想が構成された時代を把握して、なお『徒然草』が成立した中世の政治・社会・文化等の社会的な様子も調べて見た。

ここで筆者は前述の論旨を中心として内容と方法を考察し、長明の無常観と人生観についてその作品『方丈記』を中心に兼好の作品『徒然草』の無常観と兼好の人生観を比較研究するのを目的とした。言い換えれば、『方丈記』に現われている無常観と長明の人生経歴及び人生観を調べて、その後、発表した『徒然草』に含まれている兼好の人生観と文学の中心思想である『徒然草』の全篇に流れている無常観を研究して、この二つの作品の各々思想を比較考察した。

II. 本 論

1. 無常観

無常というのは一般的に仏教思想であると考えられる。でも、無常は思考の様式であって、『方丈記』、『平家物語』³⁾等を調べて見るとその無常は必ずしも仏家の思想だけを表わすのではないことがわかる。中世の無常観は一種の厭世主義である。

そして、『方丈記』の作者である長明は現世の詠嘆的な無常観を主張した。無常観について時代・原因・状況等を究明して見ると中世の無常観をもっとも詳しく知ることができる。日本の歴史で中世ほど下剋上と同族間の殺傷が盛んに行われた時代はそれ以前にはなかった。即ち、王族時代の貴族社会が没落してから武士段階が擡頭したのである。

尚且、天変地異のため疫病・饑饉等の脅威を受ける中世人たちは万物はみんな変転するもので、また、人間の世のすべてのことは「常」でないと言う感覚を根本に、自己の思い通りにできないとし、過去を回顧しながら詠嘆する考えを持ったのである。これが即ち、詠嘆的な無常観である。

2) 古来の朝廷、武家の風俗、風習等を研究して、學文またそのようなすべての面に対する事実をいう。

3) 軍記物語、流布本は十二巻、諸行無常、盛者必衰の道理が流れていて、いろいろの姿の人間像を生々しく描写している。

ところで、人間が煩いながらいつまでも詠嘆だけしたのだろうか。生きながらわずらい、わずらいながら問題を解こうとする多くの哲学者や宗教家の努力があったが、これまでも完全な解決方法は見付けられなかった。

中世の有名無名のいろいろな宗教家たちと聖職者、そして隠者たちはこの問題で苦しみながら無常を自覚することになる。

長明の晩年の作品『発心集』⁴⁾に現われる一部を引用して見ると「仏の教へ給へる事あり、心の師とは成るとも、心を師とする事なかれ」と始めて、「實なるかな此の言。人一期のすぐる間に、思ひと思ふわざ悪業に非ずと云ふ事なし、若し形をやつし衣を染めて世の塵にけがされざる人なら、そとものかせぎがたく、家の大常になれたり。いかに況や因果の理を知らず、名利の謬りにしずめるをや。空しく五欲のきづなに引かれて、終に奈落の底に入りなむとす。心有らん人、誰か此の事を恐れざらん。」と書いてある。人間の心は欲望に支配される。したがって「心の師とは欲望と言いかえなるとも心を師とする事なかれ」と言い、もし人間が心に引かれるようになったらその生涯は「空しく五欲のきづなに引かれて終に奈落の底に入りなむとす」と言っ、これが即ち、人間の心であると言っている。

長明は方丈で閑居生活の榮華を経験した。彼は奪うために父を殺害したとか、兄である崇徳上皇を島流しにしたとか俗世の人間の醜悪相をまるで禽獣と同じだと見た。『徒然草』では人間はこのような欲望を抑壓しなければならないと主張している。

中世人たちは、なお、無常そのものを積極的に捕えるような心の準備をして、萬物必滅の事実を自覚するようになり、これを思想化するにいたった。即ち、自覚的な無常観を確立したのである。自覚的な無常観ということはこの世のあらゆる変化を順理と考そて、事実で受け入れる心の無常観をいいで無常の道理を弁まえてそれ自体を自然界の理致と考えて受けとめた観念である。

ここでは長明と兼好の無常観に対してお互に相異点を比較考察して、なお、日本の中世無常観の変化をしらべることをその焦点にしたい。時代的には二人の作者は同じ中世人であるが、その生存年代は一世紀の差がある。長明は中世初期(1153～1216年)の文人で、兼好は中世中期(1282～1350年)の文人である。この二人の作品は約100余年程度の執筆の差があつて時代と思想もまったくちがう。では、これから長明と兼好の無常について、もうすこし詳しく考察して見よう。

1) 鴨長明の無常観

4) 発心集は長明の作品で発心説話と遁世説話を成す結果として、往生を行なう往生説話があり、方丈記の隠者思想と宗教心との関聯された作品(1212年作)

鴨長明の歴史的な背景を調べて見ると時代はちょうど平清盛⁵⁾が藤原氏から政権を奪ったが源頼朝⁶⁾によって平家一門が滅亡した一大轉換期であった。その時期は日本の中世で、平安朝末期から鎌倉初期にわたる平安貴族が没落して武家が登場したところで、承久の変、南北朝の対立で應仁の乱等の果てなき内乱等で動搖がはげしい時代であった。したがって民衆の思想は筋道がつかめないでいた。この時平安貴族らの後裔たちは過去をなつがり現状を恨歎して、この世の無常を詠嘆しながら日月を送るようになった。ここで西尾實氏の説を引用することにする。彼は『方丈記』の著者は無常を詠嘆している。わけても、人間との住家との無常に限らない詠嘆を寄せている。が、それは僧蓮胤の無常教説ではなく、人間長明の無常詠嘆であるところに、方丈記文学の成立が可能にされている。」と述べており、『方丈記』文学の成立を可能にしたのは長明が無常を詠嘆したことにあると主張していた。⁷⁾ 西尾實の主張がなかったとしてもこのような点は『方丈記』の冒頭部分を見たらすぐ理解できる。

「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶ泡沫は、かつ消えかつ結びて、久しく止まりたる例なし。世の中にある人と栖と、又かくの如し。」⁸⁾ (いつも滔々とゆく河の流れは絶えることなく、それでいて、もとの水ではない。流れのよどみに浮ぶあわは、一方では消えるかと思うと一方ではまたできたりして、いつまでもそのまま存在しているものはない。この世に生きている人と住んでいる家とが、やはりこのようなものである。) このように長明の世界観を端的に現わして見ると、あらゆる人生と自然は一旦、生成消滅することは『方丈記』の冒頭で示したように、この世の無常は詠嘆に始まり、作品の全体が詠嘆に一貫しているということがわかる。特に長明の『方丈記』で詠嘆がよく現われた部分を引用して見れば「その主とすみかと、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。或は露落ちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。」⁹⁾ (その家の住人と仮の宿りの住居とが、無常を競いあっている様子は、換言すれば、朝顔の花と朝顔に置いた露との関係と変わらない。あるものは露が落ちて花だけ残っている。残っているとはいっても、朝日の光の中で枯れてしまう。), 「また、いとあはれなることはべりき。さがりたき妻・をとこ持

5) 平清盛は平治の乱(1159年)で勝ち、1167年武士で太政大臣にのぼった人物で1185年政権を据えたが源頼朝によって滅亡する。

6) 源頼朝は平家を滅亡した鎌倉の第一代將軍。

7) 西尾実, 方丈記, 徒然草, 岩波書店, 1974, p. 29.

8) 赤根祥一, 無常の思想, れんが書房新社, 1980, p. 124.

9) 島田良夫, 文法典解 方丈記・無名抄, 旺文社, 1985, p. 20.

ちたるものは、その思ひまさりて深きもの、必ず先立ちて死ぬ。」¹⁰⁾ [養和の飢饉] (また、たいそう心から感動させられるようなこともありました。離れがたい妻をもち、また去りがたい夫をもった。愛にみちた夫婦の間では、その愛情のより深いがわの者が、必ずさきに死んでいった。)といった。この内容は自分自身を後にして無心に相手を思いやる心である。即ち、飢饉に直面した者がようやく得た食べ物を自分は食わず変人に譲るといふ慈悲(いつくしみ)深い人が先に餓死すると言うことの意味である。

前述の例で見たように無常の詠嘆は『方丈記』の文章のあらゆる部分で見ることができる。このように長明は『方丈記』の中で極限的な状況とか精神的な荒廃にまでいたる極く悲惨な無常の状態を冷徹な視覚で描写している。そのことから長明はこの世の無常をうらみ、詠嘆的無常観だけに固執し、主張していたことが窺われる。

2) 兼好の無常観

無常というのは一般的に仏家の思想と知られているが、『方丈記』、『平家物語』の無常は必ずしも仏教の思想だけを論述していないということがわかる。『徒然草』における無常観は仏教的な無常観を基礎にして作者である兼好なりの方式によって『徒然草』のいろいろな所に敘述されている。中世の無常観というのはこの世を無常と考える仏教思想と当詩の暗黒相に於いての人生は無意味で嫌悪なものであるとの一種の厭世主義をさす。即ち、無常の様相である世相のすべての変轉相を嘆く心像とか、恐怖の感情でこの世を無常と受けとめた詠嘆的無常観とこの世のあらゆる変化の理を事実と受けとめるが、無常の道理を悟り、無常そのものを自然界の理致と受けとめて、無常な現世に対処することができる無常対処法である自覚的無常観を提示したのを兼好の無常観とすることができる。

このように兼好の無常観は二つの性格をもって『徒然草』に現われている。一つは『方丈記』に見られる詠嘆的な無常観で、もう一つは『徒然草』の30段以後から多く見られる自覚的無常観¹¹⁾である。特に兼好の『徒然草』の作品から詠嘆をよく現わした文章を引用して見ると「家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、仮りの宿りとは思へど、興あるものなれ。……さてもやはながらへ住むべき、また時の間の煙ともなりなんとぞ、」¹²⁾(徒然草第10段)(すまいがしっくりと調和がと

10) 島田良夫, 「前掲書」, p. 42.

11) 韓再龍, 徒然草の研究, 啓大大學院碩士論文, 1982, p. 17.

12) 田辺爵, 古典評釈 徒然草, 右文書院, 1986, p. 29.

れていて、好ましいのはこの世における一時の宿とは思っても、やはり興味のあるものである。……これもまた、一瞬の間の煙となって焼けてしまうであろうと)調和のとれた住居は「仮りの宿り」人生は「時の間の煙」と表現した句節は人生の無常をもっとも適切に表わしたすばらしい表現といえる。また、「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、楽しみ悲しび行きかひて、」¹³⁾(徒然草第25段)(飛鳥川の淵と瀬が変わりやすいように定めない世の中であるから、日時が移り、物事が流れ去り、楽しみと悲しみが交互に行き来して)この段では無常な現世を飛鳥川の淵とか、浅瀬の水のように変りやすいものに比喻して人生の無常を論じた、『徒然草』の第137段には「若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。……静かなる山の奥、無常の敵きほひ来たらざらんや。その死に臨めること、軍の陳に進めるに同じ。」¹⁴⁾(年が若いからとか、体が頑強だからとかに関係はなく、思ひもよらぬのは死の時期である。……静かな山奥だつて、無常という敵が争ってやって来ないであろうか、来ないことはない。ちょうど、その死に直面する点では、草庵生活も戦場に出ているのと同じことなのである。)ここで無常を痛感して、世を捨てる隠者である。兼好が無常に於いてもう一度自覚するようになって、安全地帯として考える草庵を死と直面する戦場ということに比喻した。

又もう一つのちがう文章を見ると「四季はなほ定まれるついでおり。死期はついでを待たず。」¹⁵⁾(徒然草第155段)(四季には一定の自然の順序がある。が、人間の死というものには順序がない。)ということは無常な人生の處世哲学的な内容について述べる。また、「人間常住の思ひに住して、かりにも無常を観ずる事なかれ。これ第一の用心なり。」¹⁶⁾(徒然草第217段)(人間界娑婆は永住不便だと確信して、かりそめにも無常観を抱いてはならない。これが、第一の心がけである。)これは大富豪の言葉を引用したもので、無常に対して不定論的とか、経済的尺度に従う人間観と現実的處世観をたてる富豪たちに儉約と正直、徳と礼を身に付けることを説明している内容である。「命は人を待つものかは。無常の来たる事は、水火の攻むるよりも速やかに、のがれかたきものを」¹⁷⁾(徒然草第59段)(寿命は火と同じで人が、待ってくれといったって、待ってくれはしない。無常[死]の到来は、洪水や火災の攻めてくるよりもすばやく、絶対に避けられな

13) 田辺爵,「前掲書」, p. 86.

14) 田辺爵,「前掲書」, p. 269.

15) 田辺爵,「前掲書」, pp. 302~303.

16) 神田秀夫外, 校註 方丈記・徒然草, 小学館, 1981, p. 223.

17) 田辺爵,「前掲書」, p. 168.

いものなのに、) 出家遁世は人間の理想的生き方の道だと強調して、精神論、観念論を排除して水、火のように速く迫る死に備えて仏道修行の環境を予じめ用意せよとの意である。このように兼好の無常観は観点によって異なるのもう一度西尾實氏の解説を引用したい。

「人生を高いところから冷静に観察した後に「期する処、ただ老と死とにあり。その来たる速かにして、念々の間に止まらず。」¹⁸⁾(徒然草第74段) (人々が期待する眞の姿は、ただ老いと死の二つだけである。老・死のやって来ることはすみやかで、瞬時もとまらない。) といって無常を悲嘆するということは「遇かなる人」である。」と彼は断定した。¹⁹⁾ 詠嘆的無常観というのはこの世のすべての変轉を感傷的に受け入れて恨歎することで、自覚的無常観というのはこの世のあらゆる変化を理致として、事実の問題で感傷的にこの世の無常を受け入れる心である。後者は無常の道理を悟って、無常そのものが自然界の理致であるとしてとり入れる心である。

「徒然草」のいろいろな部分で後者に当る無常の理致を指摘することができるが、自覚的な無常観の観点でその一部を引用して見ると「人はただ、無常の身に迫りぬる事を心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり。さらば、などか、この世の濁りも薄く、仏道をつとむる心もまめやかならざらん。」²⁰⁾(徒然草第49段) (人は、ただ、死がその身に迫っていることをしっかりと心得て、わずかの間も忘れてはならないのである。そういう心がけならば、どうして現世の利欲も少なくなり、仏道修行の心もまじめでないことがあろうか。利欲もうすらぎ、仏道修業の心もまじめになろう。) 人間は死を自覚して老いない中に果すべきことはすべてを果し、仏道修行を絶えず緩みなく行い無常に対しての対処法を説いている。「不定と心得ぬるのみ、まことに違はず。」²¹⁾(徒然草第189段) (ものごとは定めがないと承知しておくことだけが、ほんとうであって、まちがわないことである。)

俗世のすべては思いどおりにはかたらないので予定とかその外如何なる法則性もないので例の無常であることを心の中に根強く感じ、無常に備えようと言うことである。「世は遁れんことこそ、あらまほしけれ。」²²⁾(徒然草第58段) (人間として生まれた生きがいすべてを排除して遁世すべきである。) 遁世

18) 田辺爵, 「前掲書」, pp. 183~184.

19) 西尾實, 「前掲書」, p. 67.

20) 神田秀夫外, 「前掲書」, p. 131.

21) 田辺爵, 「前掲書」, p. 345.

22) 神田秀夫外, 「前掲書」, p. 181.

するのが人間の理想的な生活方式ということを強調し、貧欲と悟道が人間にとってのけものようだと痛烈に攻撃している。「世はさだめなきこそいみじけれ。」²³⁾(徒然草第7段)(この世は無常であるというのが、素晴らしいことなのである。)有限な人生を生活感情的次元で肯定しており、有限的な人生を人生らしく充実して生きる条件と言った。その時代には人間にとって適当な寿命は四十歳と考えられていた。長く生きればみすばらしい姿を見せるだけだと思った。「雪のおもしろう降りたし朝、……今は亡き人なれば、かばかりのことも忘れ難し。」²⁴⁾(徒然草第31段)(雪が趣深く降った朝、……今はもうなくなった人であるから、これほどのちょっとしたことも忘れられない。)楽しかった昔の追憶を回想しながら亡き女人に対してのなつかしさと人生無常を慨嘆した。「亡き人の手習ひ、絵かきすさびたる見出でたるこそ、ただその折の心地すれ。」²⁵⁾(徒然草第29段)(今はこの世に亡き人が文字を書きちらした[反古]だの、絵などを書き興じた[反古]などを見いだしたのは、ただもう[その人の生きていた]その当時のような心持ちがするものだ)故人の遺品から過去の歳月を回想しながら人生の無常を実に感想的に表わした。「折節の移りかはるこそ、物ごとにあはれなれ。……折しも雨風うちつづきて、心あわただしく散りすぎぬ。……いにしへのことも立ちかへり、恋しう思ひ出でらる。」²⁶⁾(徒然草第19段)(四季それぞれの季節の移り変わるのは、すべてのものについて情趣深いものである。……あいにく雨や風がつづいて、気ぜわしく散りすぎてしまう。……昔のことも、当時にかえって、自然なつかしく思い出される。)季節の変化に依る感興を感じながら散る花のようにはかない人生の無常を説いた。

「生をむさぼり、利を求めてやむ時なし。身を養ひて、何ごとをか待つ。期するところ、ただ老と死とにあり。」²⁷⁾(徒然草第74段)(生命に執着し、利益を求めて終わる時がないことなのだ。自分一人を養って、何事を期待するのか、何も期待できないのだ。人々が期待する眞の姿は、ただ老いと死の二つだけである。)無常をわきまえず無自覚に生きようとあせる人間のばからしさをきびしく叩き付けた。

前述のように兼好の文章ではいささか無理な点もないのではないが、全く気魄が豊富であり、明快な論理性で一貫している。彼はなぜ老・死に対してあれほど

23) 田辺爵,「前掲書」, p. 23.

24) 田辺爵,「前掲書」, p. 110.

25) 田辺爵,「前掲書」, p. 99.

26) 田辺爵,「前掲書」, p. 62.

27) 田辺爵,「前掲書」, p. 183.

激烈に書いたのか。彼の遁世生活は彼が考えている出家者の生活とはへただりがあるようで、出家と遁世に兼好自身もある程度ちゅうちよしたように思われる。

又遁世後の生活も当初の考えとは大きく異り彼に満足と安堵をもたらすことはできなかった。理念と現実のへただりが顕著で、無償・死・老いに自身の精神をどうにか集中させ緊張しようとした彼は他方では弛緩し、覚醒した自分の心をかえりみざるを得なかった。兼好はたいへん苛酷に過ぎるとわれるほど悲惨に自分自身に対してのうっぶんも抱いていたことも事実で、又激烈すぎるほど自身に対する憎しみも心のどこかに抱いていたと思われる。

3) 長明・兼好の無常観比較

前述の如く長明の無常観は中世初期の時代的背景に影響され当時の詠嘆的な無常観を受け入れ、方丈庵生活の晩年には「しづかなる暁、このことわりを思ひつづけて、みずから心に問ひていはく、世を遁れて、山林にまじはるは、心を修めて道を行はむとなり。」²⁸⁾(念仏と沈黙) (静かな早暁、この道理について考えつづけ、自分自身で心に向かって問いかけたことは、俗世を避けて、自然と接触するのは、修行して仏道に励まんがためである。)という部分で、自己の過去を反省したのである。『徒然草』の兼好も始めには詠嘆的な無常観を多く書き続けたが、三十余段からは急旋回して「変化の理致」をあらかじめ悟るようになり、無常それ自体を「変化の理致」とし、自覚的な無常観を確立した。兼好の自覚的な無常観は『徒然草』において二つの形式が窺われるが、一つが前述した「死の無常」(徒然草第155段)であり、もう一つが「無常変易の境ひ、ありと見るものもなせず。始めある事も終りはなし。志は遂げず。望みは絶えず。人の不定なり。物皆幻化なり。何事かしばらくも住する。」²⁹⁾(徒然草第91段) (常住不変でなく、変化してやまないこの世では、存在していると思うものも実在はしない。始めのあることも終わりはない。意向はとげられない。それなのにのぞみはつぎつぎ起こって絶えない。人の心は定まりがない。物はいつさいまぼろしのように変化するものである。どんなことが、しばらくの間でも変わらずにとどまっていたらどうか、とどまっていたらしない。)とした部分で、この世は夢の幻像で萬物の存在はすべて虚望で実際は存在するのではないということだ。

このような無常観は中世の中期以後に至り、武士たちにひろく伝播した夢幻泡

28) 島田良夫, 「前掲書」, p. 83.

29) 小山光, 文法典解 徒然草, 旺文社, 1984, p. 134.

影観で、ともかくこの世はゆめの幻像で、生きていてもそうだし、死んでもさほど変わりがないと言い、死の恐怖を積極的に受け入れた無常観である。この『徒然草』で中世初期にひろく伝播していた末法思想から藤原の榮華のはかなさをうらんだ詠嘆的無常観から中世後期において無常それ自体を事実として受け入れるという自覚的無常を兼好が確立した点を高く評価できる。これは前述の長明の詠嘆的無常観とは相当なへただりがあることがわかる。

2. 人生観

人生観とは一般的には対象人物の出生・成長過程にはじまり彼が影響を受けた期間の彼の思想・哲学・文芸・主張等を總網羅した人生の存在価値を言い、その人物に対しての意味や目的等にふくまれる總体的思考方式を意味すると言える。『方丈期』の作者長明の人生観は幼い時の家庭的不遇から生成したと思われる。長明は幼い時からその父親長継の代を引き継ぎ、神官の禰宜が保障できると信じていたが、父親の死後その同族の祐季に奪われ、その子祐兼が神官の地位を継ぐと俗世を捨てて隠者になり方丈の庵子の中で孤独な生活をするようになった。幼い時から孤兒の如く育てられた彼には現世への慾求不満がその人生観に至大な影響を及ぼしたと思われる。

『方丈記』に見られるその当時の社会相は大火災、旋回、飢餓、旱魃、地震等天変地異でたいへん惨酷な乱世であった。このような中で長明は人生のはかなさと無常を感じ仏道修行をするうち求道精神を悟るようになった。

『方丈記』に表われる彼の仏教思想、維摩教の淨土思想等は彼の人生観の主な思想で詠嘆的無常観を主唱するのに影響を及ぼしたと思う。

『徒然草』に表われた兼好の人生観をして見れば、作品全篇に流れている無常観と隠者思想と自然観等に兼好の知恵を体得することができる。また仏教・儒教・道教だけでなく、有職故実等にも多才多能な兼好が書いた『徒然草』は仏教的無常観を基底にしている。

思索的で合理的で内省的な兼好は“萬物は生生流轉”と言う無常を根底にした平安朝の「あはれ」「をかし」³⁰⁾と共に情趣ある余情美の自然観を主唱し、作者としての意見と感想を中心にし、隨想や先人の逸話・言行を説話的に書いた。またこの『徒然草』は作者の直接経験を自傳的に表現し、その中に仏教的無常観を加味した作品であると言える。

30) 李榮九訳、日本文學概論、教学研究社、1982、p. 32.

この作品には仏教、道教、平安朝以来の趣味と中世的な閑寂趣味がよく表現されていて、彼の無常世界に対する対處などがよく現われており、兼好の王朝時代の貴族的な面も見られる。今『方丈記』と『徒然草』にある中世時代の歴史的背景と政治、社会、文化等を探り、二つの作品に現われた長明と兼好の人生観を考察にみることにする。

1) 鴨長明の人生観

前述のとおり長明の人生観は、彼の家庭が平担ではなく不遇な事件から始まったと言える。鴨神社³¹⁾の攝社、河合社の禰宜の長継の次男として生まれた長明は同族の祐季に神官の座をうばわれると希望を捨て隠遁するようになり、隠者になって俗世を離れた。同時に人間本然の思想から離脱することになり、人間自体を捨てることで人間としての欲心と煩惱から解放され、自由で閑寂な生活の中に入り込むようになった。

それでは、長明の人生観がどんなものであるかを見ることにする。いくつかの戦乱と人間相互に付き纏う理解、葛藤の中でだんだん失望を感じていった長明は如何に生きるべきかの苦惱の中で結局「いづれの所を占めて、いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を休むべき。」³²⁾(ありにくき世)(どのような場所をひとりじめして、どのような暮らしぶりをしたら、しばらくでもこのわが身を落ち着かせ、ほんのわずかでも精神的な労苦を休めることができるであろうか。)と決心し、出家した。大原は平安中期から浄土教³³⁾を基盤にして庵子を建て、隠遁している隠者が多かったところである。

このようなきっかけで長明も大原山に隠遁するようになった。このようなことから彼の宗教的背景が浄土教であることがわかり、『方丈記』は無常観がその核をなしているがこのような無常観がその核をなしているがこのような無常観は仏教の一派である浄土教、即ち、仏教思想の表徴であり、儒仏思想を離れては存在し得ないということがわかる。『方丈記』の全篇は流れている思想を一言で集約すると無常であり、このような無常観がこの作品の核心をなしている。また『方丈記』は「人生の無常を説き、処世の悩みを論じ、独居の楽しみを論じ」であると簡単に要約している。

31) 京都 下賀茂神社の末社

32) 島田良夫、「前掲書」、pp. 51～52.

33) 鎌倉初期に 戦乱時代の人々の心と中に影響を与えた仏教の一派で念仏を唱えて死後の浄土往生を取らえる宗教

また例を上げると「ここに六十の露消えがたに及びて、さらに末葉の宿りを結べることあり。」³⁴⁾(さて六十歳の露が消えそうにはかない老年に至って、更に終えんを迎える命の安住のいおりをかまえることがあった。)いくばくもない自身の運命を草葉の露に比喻して人生のはかなさを記述し、「秋のひぐらしの声、耳に満てり、うつせみの世をかなしむほど聞こゆ。」³⁵⁾(秋はひぐらしの声が、耳にこだまするように満ちあふれた。はかないこの世を悲しむほどに聞こえる。)においてははかない人間世相をうつせみが悲しそうに鳴いている情景に比喻した。

『方丈記』に窺えるように長明は父親に早く死なれ家門からも追い出される不遇な人生であったので、人間は常に闘争しなければならない濁悪な世のために自身の不幸は彼の一生を通じて心に深く刻まれていた。眞実に求道者の姿勢も考えられ、名誉と利益に対する強い執念とか慾求も心の中に深く残っていただろうと思われる。

またこのようなことは彼が父親の禰宜を継ぐという希望がなくなった時、どうしても名利を回復しなければならぬまいと努力した理由であることがあきらかに窺われる。長明は二十代になって俊恵法師³⁶⁾が駐在する歌林苑で和歌を習い、養和元年(1181年)、彼が二十七歳の時最初の歌集を編纂した。

このようなことは禰宜になろうとした希望がなくなったことによって彼が成就しようとした出世榮達の方向を「和歌の寄人」の方に変えたと考えられる面でもある。一方俊恵との師弟関係で俊恵の門下生³⁷⁾になり、幽玄、余情の美を尊重し、自然の感興を大事に思ったのである。また和歌の師である中原有安³⁸⁾からは音楽を習い才能も認められるようにもなった。このように長明の人生観は波乱万丈で作品全体に流れている無常観には深奥な仏經の眞理が籠られているので一言で断定することはできないが、彼の思想を要約すると詠嘆的無常観を主張していることが分り、また彼の作品世界に表われている人生観は無常観がその核をなしていることもわかる。

2) 吉田兼好の人生観

『徒然草』に表われた兼好の人生観は宗教的ばかりでなく哲学的でもある。

34) 島田良夫、「前掲書」、p. 58.

35) 島田良夫、「前掲書」、p. 61.

36) 源経信の孫子、源俊頼の子、歌林苑を主宰しているし、長明はそこで一員で勤めた。

37) 朝長ノリ、日本文学論集、南榮文化史、1984、p. 154.

38) 宮中の楽所で勤めた楽人、琵琶の名人、長明の琵琶の師範。

しかし、兼好は宗教人でも哲学者でもなかった。兼好の特性は宗教家的・哲学者的性格の所有者であるにもかかわらず、かえって文人的芸術家的であったことにある。言いかえれば、兼好は哲学的にも論理的にも人生を解明しようとしなかったし、また宗教的境地に心酔し、人生の救援を得ようとしなかった。『徒然草』で触れた内容は人生に対する仏教教理に関することでその内容に深く有益な教訓が多く出ている。そして兼好の宗教的で、哲学的で芸術的な性格は人生のいろいろな姿を含んでおり、智慧でみなぎっている。

それでは『徒然草』作品の中に含まれている豊富な智慧と兼好の深い人生観に関して考察して見ることにする。中世時代の文芸は一般に暗くて、ゆううつな人生観が基底をなしていた。しかし『徒然草』ではゆううつな姿は見られなく、また無常観を詳しく説明してはいるが厭世的で、悲観的な姿は少しもない。

兼好は『徒然草』のいろいろな文章で表現したように急速に近づく死への自覚を悟らせようとする文章を何度も繰り返している。例えば「人はただ、無常の身にせまりぬるまじきなり。」³⁹⁾(徒然草第49段)(人は、ただ、死がその身に追っていることをしっかりと心得で、わずかの間も忘れてはならないのである。), 「もし人事たりて、我が命、明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るる間、何事をか頼み、何事をか營まん。我らが生ける今日の日、何ぞその時節に異ならん。」⁴⁰⁾(徒然草第108段)(もしある人が来てお前の生命は、明日なくなるに違いないと宣告したとしたら、その時は日の暮れるまで、何を頼み、何を骨折ってやろうとするか。我々の生きている今日という日は、明日死ぬといわれその時を待っている時とどこが違うだろうか。), また「貧る事のやまざるは、命をふる大事、今ここにきたれりと、たしかにしらざればなり。」(徒然草第134段)(果てない欲望が起きる理由は、命が尽きる一大事、即ち、死が目前にあるということをはっきり知らないからである。), 「死期はついでをまたず。死は前よりしも来たらず、かねてうしろに迫れり。人皆、死あることを知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来たる。」⁴¹⁾(徒然草第155段)(人間の死というものには順序がない。死は前方からやってくるとは限らない、気づかぬうちに背後に迫っているのである。人はだれでも、死というもののあることは知っているが、しかも死を予期することは今すぐとは思っていないのに、気づかぬうちに突如としてやってくる。)このような例のすべては死がつかの間に来ることを人間に説いて分らせるためである。その上、死は常に急に「覚え

39) 小山光, 「前掲書」, p. 83.

40) 田辺爵, 「前掲書」, p. 225.

41) 田辺爵, 「前掲書」, p. 303.

ずして」来るものである。しかしそれを「心にひしとかけて」考える人はあまりいない。死がいつかは来ることを人間であるならば自覚しない人はいない。けれども、そのことを切迫したものとして自覚する人もあまりない。

自己の死を忘れている時にいろいろの不必要な時とかこのましくない形で不幸が発生すると人は死の自覚を「心にひしとかけて、つかのまも」忘れられないようになるだろう。すなわち、死を考えるにつれて、貧欲と欲のために人に苦痛を与えたり、またその欲のために起因する多くの人生の不幸—それらが本当に遇かなものであることを人々が反省すればどんなに濫かくて情深い世になるだろうかと反問している。

兼好はただ無常を嘆いているだけではなく、彼は死が来ることを冷厳な事実として自覚しているにもかかわらずゆううつな姿には少しも解れていない。彼は無常な人生を肯定すると同時に死も肯定している。彼の人生の肯定は思うとおりにできない無常な人生の肯定であり、その肯定の中で人生の意義を探そうとする人もあれば、死も思うとおりにできない、人生の結果と見て、その死を人生において重要な要素として認定しようとしている。

暗鬱な近代に発生した実存哲学は死の可能性のある人生の不安を強調しているが、その不安は救われにくい虚無へ通じるものであると述べている。人がそこから探し出すものはただはかない人生の不修理に絶望するだけである。

これに反して兼好は死が訪れて来ることを痛感すればするほど生きている間の人生に意義づけをしようと思った。兼好はみだりに絶望することなく、死の絶望を見事に克服しようとした。彼は悠々と人生を楽しもうとした人生ではなく、人生の幸福は結局、単順な快樂だけでは得られないと考えた。兼好は死と言う深い悲哀を背景にして人生を楽しもうとし、死によって限られている人生を十分に認識しながらエンジョイ(enjoy)しようとした。

また死があるために人生は哀れで、その哀れのために人生は生きる価値があると述べている。そのような考えで「家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、かりのやどりとはおもへど、興有るものなれ。」⁴²⁾(徒然草第10段)(住居が、住む人と調和がとれていて、好ましい感じであることは、はかないこの世の仮の宿にはすぎぬとはいうものの、興趣のあるものだ。)との人生観に到達する。すなわち、兼好は人生は有限であり、人生は「かりのやどり」にすぎないものと言っているが、住居だけは快適なものを望んでいる。それほど長くはない人生であるだけでもっと快適な生活をしなければならないということで

42) 田辺爵,「前掲書」, p.29. 再引用.

ある。また人々が人生は短いということは「あかずおし」と思うからであり、人間が求める欲は無限な欲望のためであると言っている。兼好は人生をエンジョイすると言っているがその生活態度は率直で欲ばらないまじめな生活をし、文字通り清貧な人で欲をいやがった。彼は短い人生に抵抗しようとするとか不満を持つのは、拒こうとはしなかった。いたずらに生にあせりを感じさせるだけだと言った。

彼はかえって短い人生こそ心の中にいつそう生きようとする欲望が隠されていると言った。無常を悲しむのは「常住ならんことを思ひて変化の理」を知らないゆえであると述べている。そして、「つくづくと一年を暮す」と言って短い期間でも長いと思う人生を当然として、いくら長く生きても足りないと思う人においては結局「千年を過すとも、一夜の夢の心地」になるばかりと言った。このような表現は満足を知らない人の心を現わしたものである。彼は生死は人間が予測できないものであり、人生ははかないものと主張し、人生の短さを嘆き、人生を楽しもうとしない人は実は人生の貴重さも知らない人であると言った。このように人生の短さはどうしようもないということを知った時これを克服しようとしたのが兼好の生き方の方法である。このように思う彼にとって人生を楽しむ生きる方法はどんなものであるかという疑問が生じる。

前述したように兼好は欲望をおさえ、欲もなく、欲ばるものもなく、生きようとする態度を持った。それが人間の理想像と思い、「よき人」の生活態度と考えた。「長くとも四十に足らぬ程にて死なんこそ、めやすかるべけれ」⁴³⁾(徒然草第7段)(長くても、四十歳に満たないうちに死ぬようなのが、実に無難であろう。)人生は十分に長いと言ったように兼好は短い人生に価値があると見て、死を結末づける有限な生にその真味があると見たのである。

また兼好は人生を最初から肯定しているので、厭世的な言葉はあまりなく、人生は思いどおりできないのを克服して人生の意義を見出そうとした。このように「あはれ」を思うぞんぶんに楽しもうとした生活態度から彼の思想が理解できるし、無常を自覚しようとした人生観がうかがわれる。また彼は人間の知識だけでは解決できない人間の知識の限界を越える神祕の世界を肯定した。彼は人間の知識を理解すること、人間の能力の限界を理解することに人間の智慧があると説いた。彼は暗い中世時代の稀貴なこととか迷信を信じることを排撃し、いつも合理的な考え方を尊んだ。そして人間の知識の限界、人間の能力の限界を自覚して人間の能力を越える神祕の世界を肯定し、有限な人生において生の方法とし

43) 小出光、「前掲書」、p. 24.

て平安朝以後ずっと維持された。

そしていっそう内面化された風雅な生活態度、すなわち、「よき人」の生活態度を賛美し、これに反する生活態度を排斥した兼好は彼の文章に多く引用された儒教・仏教・道徳的な知識で徹底的に、批判的に、自由な立場から書いた批評家であったとも言える。また「あはれ」を存分に享樂しようとした生活態度を見ても彼の思想を知ることができる。いわば兼好はすべての事実を自覚して、自覚的無常観を主張しており、この自覚的無常観は彼の人生観の基をなしている。

3) 長明・兼好の人生観比較考察

長明と兼好の人生観における相異点を考察し、二人の作家の異なる面をさぐって見ることにする。まず長明の『方丈記』の例を上げると、「また、いきほひあるものは貧欲ふかく、ひとり身なるものは人にかろめらる。財あればおそれ多く、貧しければうらみ切なり。」⁴⁴⁾(また、権勢ある者はどこまでも欲深く、孤立して寄るべきものない者は他人に軽んじられる。財産が豊富だと心配も多くなり、貧乏であると人をうらやむ思いにとらわれがちとなる。)のように長明は禰宜をうばわれることによって心理的反抗をすることになり、社会を離れて人間に対する仕返しの心が彼の胸を埋めていた。また社会は弱肉強食の混濁した世相と思い不満と恨をいだくようになった。そして俗世になんらの未練もなく三十歳に出家した。また「世にしたがへば、身くるし。したがはねば、狂せるに似たり。いづれの所を占めて、いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を休むべき。」⁴⁵⁾(自らの言動を抑制して世界の慣習・常識に従うと、わが身は束縛されて苦しい。といて従わないと、気が狂っているように見える。どのような場所をひとりじめして、どのような暮らしぶりをしたら、しばらくでもこのわが身を落ち着かせ、ほんのわずかでも精神的な勞苦を休めることができるのであろうか。)現実の混濁世相を離れて一時でも心のいこいを取ろうとした。「すなはち、五十の春を迎へて、家を出で、世を背けり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとどめん。」⁴⁶⁾(すぐに、私は五十歳の春迎えて、出家し、遁世してしまった。もともと妻や子どもがいないので、離れにくい縁者もなかった。私には官位も俸祿もないので、何事に対して執着することがあろうか。何もあ

44) 島田良夫,「前掲書」, p. 51.

45) 島田良夫,「前掲書」, p. 51. 再引用

46) 島田良夫,「前掲書」, p. 55.

りはしない。)このように長明は一生涯妻子も官職もない不遇な生活をしたので人間を離脱して、もっぱら社会からの遁世だけが、人間が楽に暮せる方法と主張した。これに反して兼好の人生觀に対して長明との異なる点を探つて論じたい。長明・兼好二人の作者は共に生を營むために生命の欲望を追求しているという点は勿論同じであるが、兼好の人生觀は長明とはいささか異なる点があることがわかる。

「若き時は、血氣うちに余り、心、物に動きて、情欲多し。身を危ぶめて、」⁴⁷⁾(徒然草第172段)(青年時代は血の氣が体内にあふれ、心は外物に触れて動き、欲情にかられることが多い。身を危険にさらして)のように兼好は人間の五欲をまず肯定しており、また俗世である人間の世界は「濁世」ということも次の例のように「世にしたがへば、心、外の塵に奪はれてまどひやすく、人に交はれば」⁴⁸⁾(徒然草第75段)(俗世間の習慣にしたがえば、自身のほんとうの心は、外界の刺激に奪われて、まよひやすく、他人と交際すると)と認めており、「濁世」をなおざりにするのではなくて、かえつてそれを積極的に受け入れて、また「大方、生けるものを殺し、いため、鬭はしめて、遊び楽しまん人は、畜生残害のたぐひなり。……すべて、一切の有情を見て、慈悲の心なからんは、人倫にあらず。」⁴⁹⁾(徒然草第128段)(およそ命あるものを殺し、傷つけ鬭わせて、それを見て面白がり楽しもうとする人は、畜生の共食いをし、害し合うの同じ悪鬼が惡魔の類である。…およそ、あらゆる生きとし生けるものを見て、情け心を起こさないようなものは、そんなものは人間ではない。)といつて、人間のよい面と悪い面とをきびしく批評し、なおこんな対象は身分の底い賤民がら貴族にいたる社會階級全般にわたり長所と段所を鋭く批判した。このように兼好は市井の隠者としてなお人間が生きている俗世を考え、人生の根源を深く深り、「事理もとよりこつならず。外相もしそむかざれば、内証必ず熟す。しひて不信をいふべからず。仰ぎてこれをたふとむべし。」⁵⁰⁾(徒然草第157段)(事[言語・動作]と理[心の悟り]とは、元來別のものではない。外に現われた言語・動作がもし正しいならば、内心の悟りは必ずでき上がる。むりに信不信を論ずべきでない。仰いでこのことを尊ぶべきである。)と語つた。なお人生は何かといい、人間精神の世界を改善しようとした。このような点は長明とは違う特色で、兼好の人生觀の特徴の論じることができる。

47) 田辺爵,「前掲書」, p. 139.

48) 小出光,「前掲書」, p. 116

49) 田辺爵,「前掲書」, p. 252.

50) 田辺爵,「前掲書」, p. 305.

III. 結 論

これまで長明の『方丈記』と兼好の『徒然草』に現われた無常観と人生観を考察した。これを要約すると、まず『方丈記』では王朝時代と貴族社會が没落して、武士階級が出現し、果て絶えず起きた戦乱等戦國時代のいろいろな天変地異を通じて長明が直接體驗した当時の現世に対する一種の厭世的な無常が感じられる。

不遇だった彼は人生に懷疑を感じたのち大原山に出家して日野外山の方丈庵で閑居生活の情趣を味い、一人で隱遁生活しながら仏道修行に入った。

彼はこの世に生きている間は絶えず去らないあらゆる苦惱と不安に悩み淨土教に専念しながら人生はこの世で束の間留るかりの生だと主張している。長明の思想は仏教思想をその基にして諸行・無常・往生思想によるものだと言えるし、維摩教による信仰性、淨土思想などは作者が人生無常の思想から現世否定の詠嘆的無常観を主張するようになった。不遇だった彼の人生のために人間の栄枯盛衰を嘆くようになり、そのような無常観が彼の人生観の核心思想をなすようになり、また彼は“どう生きて行くのか”に対する解決方法を探そうとした。このような点が彼の人生観であったと思われる。これに反して兼好は無常を詠嘆する一方、自然観、女性観・恋愛観など自然法則である世のすべての変転事を無常としてうけ入れているが、この無常に対する対処法を打ち出した自覚的無常観として思想的発展をなしたと言える。そして“人間は如何に考えるべきか、如何に生きるべきか”と言ういわば、人間の生に関したものが兼好の人生観の根本思想であったとすることができる。

参 考 文 献

- 唐木順三：無常，筑摩書房. 1985.
桜井好郎：日本の隱者，塙新書. 1986.
守屋毅：日本中世への視座，日本放送出版協會. 1985.
永藤靖：中世日本文学と時間意識，未来社. 1984.
赤根祥一：無常の思想，れんが書房新社. 1980.
島田良夫：文法典解 方丈記・無名抄，旺文社. 1985.
田辺爵：古典評釈 徒然草，右文書院. 1986.
神田秀夫外：校註 方丈記・徒然草，小学館. 1981.
小出 光：文法典解 徒然草，旺文社. 1984.
三木紀人：方丈記，徒然草，尚学図書. 1980.
李榮九：日本文學概論，教学研究社. 1982.
韓再龍：徒然草の研究，啓大碩士論文. 1982
朝長ノリ：日本文學論集，南榮文化史. 1984.
西田正好：無常の文学，塙新書. 1975.
久保田淳：西行・長明・兼好，明治書院. 1979.
河容大：兼好法師の生活理念の考察，外大碩士論文. 1976.
西尾実：方丈記・徒然草，岩波書店. 1974.

A Comparison of KAMONO-CHOMEI
and YOSHITA-KENKO in the Vanity of
Life and the View of Life
—In Case of Houjou-ki and Tsurezure-kusa—

Chang, Jin soo

Abstract

During the middle-ages, as a result of natural disasters and continual wars, the aristocracy of Japan collapsed to be replaced by a warrior class.

In this time KAMONO-CHOMEI, author of HouJou-ki, following a deprived childhood took a sceptical view of his present world and entered the Buddhist priesthood.

He lived a very secluded life in a small self-built square temple meditating and lamenting on the vanity of life. He deplored the uncertainties of life.

In contrast YOSHITA-KENKO took all the vicissitudes of life as the law of nature. He asserted that uncertainty in life was in itself inconsistent and, therefore, humans should not despair and dwell on their misfortunes but should pursue life openly, freely and vigorously. He attempted to trace human beings to their origin and to how they should think and behave.

In this paper, the author investigated both the vanity of life and the view of life, making a careful comparison of them through the writers CHOMEI, KENKO and their works.